きみろん１５

「きみろん」のテキストは、まず「きみろん１５」からはじまります。どんな風にテキストが作られているか。簡単に説明しましょう。右の資料は、「きみろん」のテキストに掲載されているものの抜粋です。

１５年後の君が
今日の新聞を読んだら・・・

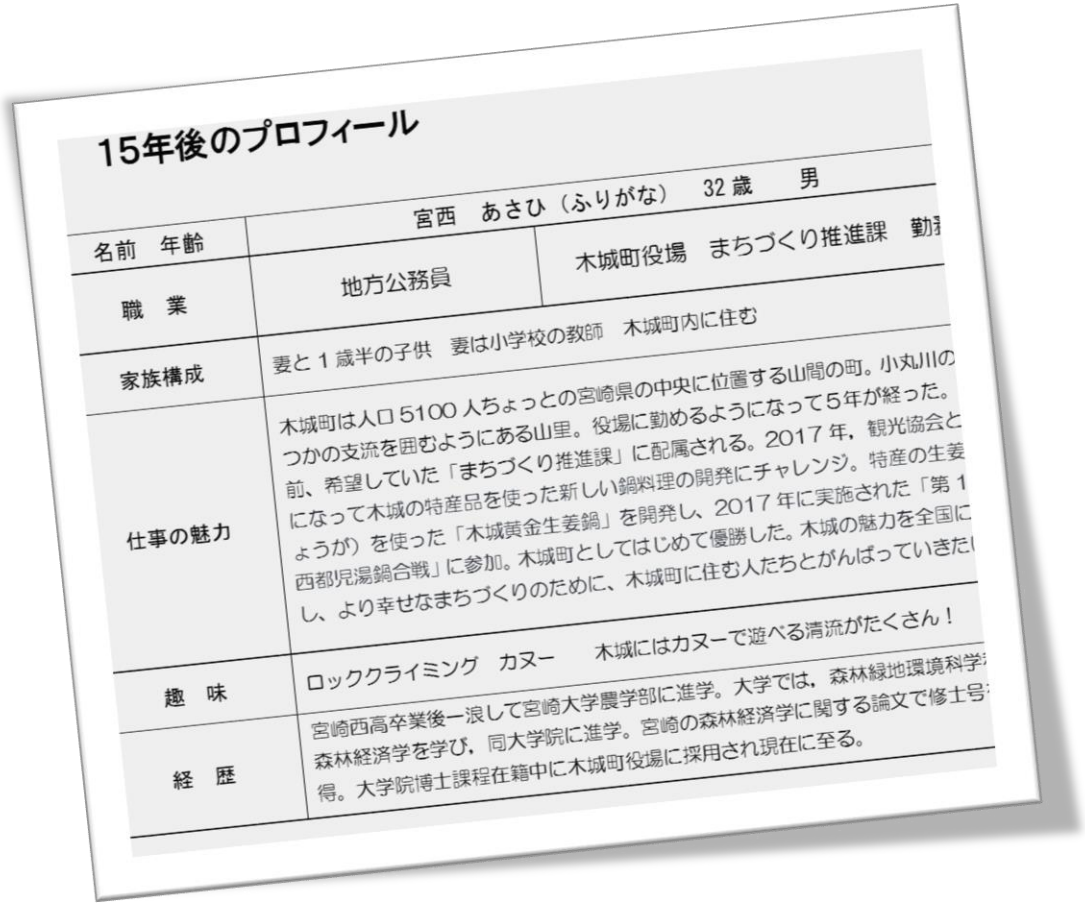
「きみろん１５」は、１５年後の君が今日の新聞を読んだら、どう読むのか。君の仕事や生活の視点から、どんな記事に注目するのか。そんな問いかけから始まります。

１５年後の君は、きっと、その記事を鵜呑みにせず、一歩引いてその記事が伝えるものを客観的に捉えようとするはずです。そのような姿勢で情報を受け入れることを、「批判的思考力」と呼んでいます。

「批判的」というと日本ではネガティブな印象ですが、実は、「何かそこに疑問を見つけ出す」という研究テーマを発見する最初の一歩なのです。英語では「クリティカルシンキング」といいます。

君のプロフィール１５年後

右の図は、テキストにある１５年後のプロフィール」の例です。宮崎大学の農学部大学院を出て、木城という美しい山村の役場に勤める宮西あさひ君。彼は、どんな新聞記事に注目したのでしょうか。



15年後のプロフィール

名前　年齢	宮西　あさひ（ふりがな）　32 歳　男	
職　業	地方公務員	木城町役場　まちづくり推進課　勤
家族構成	妻と１歳半の子供　妻は小学校の教師　木城町内に住む	
仕事の魅力	木城町は人口 5100 人ちょっとの宮崎県の中央に位置する山間の町。小丸川の つかの支流を囲むようにある山里。役場に勤めるようになって５年が経った。 前、希望していた「まちづくり推進課」に配属される。2017 年，観光協会と になって木城の特産品を使った新しい鍋料理の開発にチャレンジ。特産の生姜 ょうが）を使った「木城黄金生姜鍋」を開発し、2017 年に実施された「第１ 西都児湯鍋合戦」に参加。木城町としてはじめて優勝した。木城の魅力を全国に し、より幸せなまちづくりのために、木城町に住む人たちとがんばっていきた	
趣　味	ロッククライミング　カヌー　　木城にはカヌーで遊べる清流がたくさん！	
経　歴	宮崎西高卒業後一浪して宮崎大学農学部に進学。大学では，森林緑地環境科学 森林経済学を学び，同大学院に進学。宮崎の森林経済学に関する論文で修士号 得。大学院博士課程在籍中に木城町役場に採用され現在に至る。	

「きみろん１５」は、１５年後の君は何をしているのか。何者になっているのか。まず、君のプロフィール作りからスタートする。これはテキストにあるプロフィールの例。

（「きみろん」のテキストから）

注目した記事とは？！

テキストでは, ピョンチャン冬季オリンピックに出場できなかった「下町ボブスレー」の記事(毎日新聞)と、日経新聞の「サバで漁業活性化」というちょっと共通性のわからない二つの記事が取り扱われています。

このあと、この記事を架空の生徒たちがどのように読んでいったのかが、吹き出しつきで説明され、次第に、「下町ボブスレー」がオリンピックに採用されなかった背景が明らかになっていきます。

そこには「下町」イコール「世界有数の技術」という誤解が隠れていることを見つけ出していくのです。

でも、サバとどう関係しているのでしょうか。

それは、テキストを読んでみてくださいね。

毎日新聞　2018・3・8
オピニオン opinion　記者の目　大迫麻記子　東京社会部

「共感力」高めて再挑戦を

「下町ボブスレー」五輪出場ならず

日本経済新聞　2018・3・8
ぷりずむ

サバで漁業活性化

地域一丸で新商品開発

３月８日は「サバの日」だ。日本は世界で最もサバ類の漁獲量が多い。世界的に水揚げが減る水産物が目立つ中、消費者にも水産業界にとっても貴重な水産資源だ。生きたまま出荷したり、地域が一丸で新商品を開発したりと、付加価値を高める動きも出てきた。

全国漁業協同組合連合会（東京・千代田）は７日、魚の価値向上を図る「浜の活力再生プラン」の優良事例の初の表彰式を開いた。目立ったのがサバの商品価値を高める取り組みだ。

高知県のブランドサバ「土佐の清水さば」は農林水産大臣賞を受賞した。関東には空輸、関西には専用車でぴちぴちの活魚のまま出荷する。

漁師は深夜に出漁し、水揚げ後も絡まった網を直し エサを付ける。負担軽減のため引退した漁師が漁具の修繕を一部担う。出漁機会の増だけでなく「技術の伝承につながっている」（漁協清水統括支所）。

静岡の小川漁協（焼津市）は漁協、漁師、地の飲食店ら全サバ関係者が知恵を出し合いか品を開発する。「サバパワーを丸ごと、手軽にをコンセプトとした「さばチキン」は水産庁長賞を受賞した。骨がなく解凍しすぐ食べられる昨年の６割増しに当たる５千個の販売を目指

水産業の経営環境は高齢化や漁獲量の減少と厳しさが増す。浜の活性化に最も重要なの「地域が一緒になって取り組むこと」（全漁連長屋信博代表理事専務）。知恵と工夫が産地のたな活路につながる。

（た

論評「ボブスレーとサバ」

架空の宮西あさひ君は、役場職員という立場でこの２つの記事についての論評をどのように書いたのでしょうか。どこに共通点を見出したのでしょうか。

題名は「ボブスレーとサバ」

意外な視点は、創造性とも深く関わり、この新聞の論評で、批判的な思考力、創造的な思考力の思考方法が紹介されます。そしてもう一つ大事な思考力も知ることができます。

それは、「協働的思考力」といわれるものです。クラスでは８グループに分かれて、グループでディスカッションしながら読み進めていきます。このとき、自分の意見と他者の意見をうまく自分の思考に取り入れていくことが大事です。意外なヒントが、グループの仲間からもたらされることがあるからです。

自分の論文を書く

「きみろん１５」の山場は、グループのみんなが新聞を持ち寄って、気になる記事を見つけ出す作業です。真剣に記事を読むグループ、なぜか大騒ぎになるグループ、自分の切り抜きを説明している人、いろんな人が出てきます。そして、その後、みんながコンテストの期限までになんとか自分の論文を書こうと集中し始めます。

多くは自宅のパソコンで論文を書きます。そして、ＵＳＢに入れた作品を提出すると、今度は、その論文を読みあう生徒審査に入っていくのです。

宮西　あさ

ボブスレーとサバ

—３月８日の新聞を読んで—

平昌（ピョンチャン）オリンピックでは，日本
手の活躍とともに多くの話題がお茶の間をに
わした。その中の一つに，東京下町の町工場が
致団結して作った「下町ボブスレー」が，ジャ
イカチーム側の契約破棄で結局使われずに終
った，という話題がある。３月８日の毎日新
「記者の目」には，なぜ五輪出場がかなわなか
たのかについて，大迫麻記子記者が追加記事
書いている。
記事によると，日本チームも2014年のソチ
リンピックの時に，この「下町ソリ」を採用す
かどうかという話になったそうである。当時
本チームは，ソチ五輪の３か月前に「下町ソ
」に27項目もの改善要求を出している。しか
，その中には積極的に改善されなかった項目
あったという。記事では，日本チームの関係者
話として「下町の皆さんは技術に自信がある
，使う側の意見を積極的に聞こうという姿勢
なかった。」（同記事より）という辛辣な意見が
載されている。その改善されなかった一例が
かれてあるのだが，それが作り手と使う側と
ギャップを示していておもしろい。引用しよ
。
「（改善項目の一つに）『フレーム（ハンドルな
が付く骨組み）の色を赤ではなく黒にしてほ
い』というものがあった。下町の関係者は『赤
情熱を表現した色。色はソリの性能に関係な
ので，変える必要はないと思った。』と振り返
。だが日本チームの関係者が明かす。『新しい
リができると，他のチームはボディの中を
我々の）横からのぞいて構造をチェックする。
ねをされたくないので（フレームが）目立たな
ようにボディと同じ黒にしてほしかった。何
か言ったが直してもらえなかった』。」（同記事
り）

当記者はこういった話に加え，海外のソリ
ーカーとの対応の差を例に出しながら、下町
ームの「共感力」のなさが今回の失敗をまねい
と分析している。作り手の論理だけで進め、利
者側の意見を聞かないと大きな失敗を招くこ
になる，というのである。
それでは「共感力」さえ高めれば次のオリン
ックで採用されるのだろうか。私は，そこには
っと大きな技術的壁があると考えている。記
によると，ジャマイカチームが最終的に選ん
のはラトビアのBCT社製であった。日本チー
と同じものだ。このソリは日本の元選手が言
ように「BTCのソリは氷にランナー（刃）が
い込む。安定性が抜群で規則違反のリスクも
い。」（同記事より）のである。比べて日本製は「
材はいいし作りも丁寧。だが，氷の上でソリが
しる感じがあって操縦しにくい。」（同選手談）
いう。まさにソリ製作において、決定的な技術
の差がある。
我々は、東京下町の町工場というと「小さい
場が集まっているが、その技術は世界トップ
ベル」という幻想を抱いているのではないだ
うか。現実には「下町ボブスレー」の技術は世
水準に達していないのである。改善要求を，技
を使って乗り越える力がまだないのである。
「共感力」は裏打ちされた技術力が生み出
ものではないだろうか。さらに言えば，「共感力
と「技術力」は表裏一体なのである。

一方，おなじ３月８日の日経（日本経済新聞
では，「ぶりすむ」と書かれた短い囲み記事が
を引いた。
そこには「サバで漁業活性化」「地域一丸で新
品開発」というタイトルが書かれてある。初め
知ったのだが，「日本は世界で最大サバ類の漁

らしれない。しかし，一番の技
レーは，あのすぐ傷んでしま
ぐま東京や関西に輸送する技
あるのではないだろうか。
ではこの記事はどこにも触
術が確立されたからこそ，「
）ではないか。

自治体で，まちづくりに
いう「新しき村」や「石井
」を生んだ，人の幸せを
が未来の木城をつくるプ
だろうか。改めて自分の
れた３月８日、サバの